

モデル事業名	「瀬戸谷再発見」宝物を磨き上げる交流・定住促進事業
活動団体名	瀬戸谷生き生きフォーラム
ホームページ	http://www.setoya.com/ikiiki_f/
所属／担当者名	会長 小田 稔彦（藤枝市本郷 藤の瀬会館内）
連絡先	電話番号 054-639-0120、Eメールアドレス oda@setoya.com
活動地域	静岡県藤枝市瀬戸谷地区

● 活動地域の概要

・瀬戸谷地区は、藤枝市の最北部に位置し、市の面積の40%を占め（合併前データ）、標高は100～870mと起伏に富んだ細長い地形をしている典型的な中山間地域に市内の2.5%の人口が住んでいる。

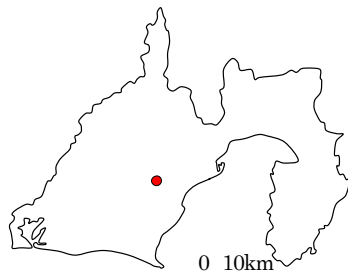
・集落数：（昭和40年3月）9集落 800戸 4,595人 高齢化率12% 小中学生1,006人

（平成21年2月現在）7集落 805戸 2,751人 高齢化率31% 小中学生 188人

・各集落：本郷 228戸 843人、中里 137戸 488人、市之瀬 84戸 283人、蔵田 43戸 146人、大久保 17戸 42人、滝沢 262戸 847人、滝ノ谷 34戸 102人（平成21年現在）

・瀬戸谷地区に關係する公共交通の状況：平成20年度末路線バス撤退に伴い自主運行バス瀬戸谷ゆらく線、大久保上滝沢線平成21年開設 H19年6.1人／台の乗車数（平日）2.0人／台の乗車数（休日）

・産業：茶の生産額 平成18年298千万円5%の減少 平成10年315千万円（藤枝市）瀬戸谷地区が藤枝市の栽培面積の50%を占めている。



【位置図】



【土地所有者の不在化が進む中山間地域】



【空き家と放置農地の状況】

● 活動地域の課題

農林業が基幹産業となっており、谷間の急峻な地形から機械化も進まず、特産のお茶や木材価格の低迷により若者の市内外への流出は著しい。人口はピーク時の半分となり、1集落では子どももなく限界集落となっており、空き家や空き地、耕作放棄地が顕在化してきている。

平成20年度の幼稚園卒園児も6名と数年後には都市部の小学校との統合、中学校の複式学級も予想される。若者の定住が進まず、このままでは近い将来コミュニティの維持困難になるなど、地域活力の低下が課題となっている。

● 活動の内容

・平成20年度

(1)地域ブランドの創出による若者の活躍の場づくり「せとやコロッケ」の取組企画

・課題調査、講演会、開発会議、まちむら意見交換会、ワークショップの開催、出前講座・くるまぎ会開催

(2)定住者増加方策の調査（空き地空き家）と活用方策の検討

・講演会、空き家調査、アンケート調査、相談コーナーの開設、ヒアリング調査、定住促進策の検討

(3)自主運行バスのシステム構築・運行開始

・バス利用者アンケート調査、ワークショップの開催、自主運行バスの提案

(4)地域資源の再発見

・中学生による地域の宝物探し、調査手法の検討、自然体験プログラムやリーダー養成の検討・実施、

・平成21年度

(1)まちむら交流センターの開設と情報共有

・地区内外の情報共有、情報掲示板の設置、たよりの発行、まちむら交流の促進

(2)自主運行バスの利用促進策の検討と実践活動

・利用者へのヒアリング、ワークショップの開催、観光コースを利用したウォーキングの実践

(3)瀬戸谷ブランド（茶・しいたけ入りコロッケ）の情報発信と人材育成

・若者が参加したツールの作成、地域ブランドの情報発信、地域ブランド情報発信、企画運営勉強会の開催

● 活動の成果

・平成20年度

(1) 自主運行バスのシステム構築のためのワークショップの開催

市と協働による撤退する路線バスの対策案の検討ワークショップの開催により、地域の活性化施設が運営する自主運行バスの運行が実現した。

住民全員にアンケートを取りバス利用の実態調査を行った結果、効率的なバス運行、バスの小型化や予約システムの導入、乗り継ぎ箇所の変更等による経費節減が図られたことによりいままでも乗り入れが困難な地区へのバス運行が実現した。



バス対策ワークショップ 開催

(2) 瀬戸谷ブランド（しいたけ入りコロッケ）の情報発信

地域ブランドの情報発信の強化を図るため、活性化施設が協力して開発した「せとやコロッケ」（藤枝市の特産しいたけ入り）の取組の一つとして、市の合併イベントに合わせて合併する町の特産の焼きそばと合体した「藤枝ころっけ焼きそばパン」の創作を行い、発表の場を検討した結果、焼きそば普及会、市商工課、市民課、神社などの協力が得られ結婚式をあげ、市の窓口で入籍まで行い市長さんに報告を行った。まじめに取り組んだことによりたくさんのマスコミの注目を集め、大きな情報発信につながった。地域内外への「せとやコロッケ」の発信により、瀬戸谷地区への来客者の増加につながり、他の農産物や加工品の販売増加も見られた。また、高齢者のみで運営していた施設ではコロッケの生産や販売員として若手（40代）の従業員を雇用するなどの効果がみられた。



コロッケと焼きそばの結婚式

・平成21年度

(1) 地域の特産のお茶と瀬戸谷地域のイメージアップの取組

茶摘時期に他地区から茶娘が手伝いに来ていました。お茶畑は、農家の男衆と女性との出会いの場であり、数々の愛が生まれた場でもあります。愛の聖地であった茶畑で、愛や感謝を叫ぶ機会を作ることにより、「愛」や「感謝」を育むアイテムとして「お茶」の役割が生まれ、新たな市場を生み出す機会となります。今回のイベントで、お茶畑は生産の現場だけでなく、愛を育むスポットとしてもPRすることで、新たな需要を生み出し、地域振興に繋げることを目的として開催しました。



茶畑の中心で愛を叫ぶ イベント

全国的に取り上げられ、地域の理解を得ることができ情報発信につながりました。

(2) 山間部の魅力発信テクニック講座

昨年から取り組んできたせとやコロッケのブランディング、マーケティング、特にプロモーション手法を山間地域で生活・生産・活動する方々に伝える講座3回とセミナー1回を開催。地区の活性化施設の関係者や新たな活性化施設の開設を計画する他市の関係者（行政と施設関係者）など約40人が参加した。参加型（ワークショップ形式）の講座受講を契機に地域外の交流促進や連携につながった。



魅力発信講座 ワークショップ

● 今後の課題及び展望

・課題

定住促進の取り組みでは、耕作放棄地や空き家等の情報が集められても、法的（農地法や都市計画法）や個人情報等の問題から、需要者への情報提供がスムーズにいかないことがあった。公的機関（市や農業委員会等）や専門業者（不動産や農協等）の協力がないと取り組み自体も難しいと感じた。

2年間の活動を通じて瀬戸谷生き生きフォーラム組織の委員構成や委員の任期（2年）等について問題が生じてきた。これは以前の取り組みよりも活動内容が多岐にわたり、新しい取組の企画活動等が増え、委員（勤めや経済性）の負担が増加してきたことが要因として考えられ、ボランティア組織から継続的な取り組みや連携のしやすい組織への変更等が課題となってきた。

・展望

地区の活性化施設には若い働き手が参加するなど、地域資源を活用して活性化を目指す機運は盛り上がってきている。また、バスの運行を開始した活性化施設も地域を担うことの有意義性を認識して来年度、運行の拡大を模索している。その中で、今まで個々の活性化施設の取り組みが連携した取り組みに進展して活性化協議会へと変化した。さらに課題可決のために今後、フォーラムの組織の再検討を含めて、継続的な取り組みにつなげて、地域の活性化や福祉活動を担う法人組織に強化を図らなければならないと考えており、今年度末を目途に法人化に向けて検討委員会を立ち上げる準備を進めている。法人化により得た収益により、若者の定住化に向けた取り組みを活発化して自立・継続循環する地域の活動につながるようにしたいと考えている。